

英米文学史講座 6

十八世紀Ⅱ

グレイとコリンズ	宮下 忠二
ブレイク	梅津 濟美
バーンズ	中村 為治
諷刺文学	西村 孝次
伝記・日記・手紙	佐野 英一
ゴシック趣味	村岡 勇
ホラティウスと古典	樋口 勝彦
ポエティック・ディクショーン	佐々木 達
十八世紀の英語	東田 千秋
大陸とイギリス文学	島田 謹二
ホガース	桜庭 信之
科学思想・哲学	原 一郎
十八世紀の世相	岡本圭次郎
アメリカの時代背景	斎藤 眞



英米文学史講座



英米文学史講座 第六卷

十 八 世 紀 II

昭和 36 年 11 月 10 日 印 刷 昭和 36 年 11 月 15 日 初版発行

昭和 55 年 3 月 10 日 10版発行

監 修 者 福 原 麟 太 郎
西 川 正 身

発 行 者 近 藤 繁 東京都新宿区神楽坂1の2

印 刷 所 研究社印刷株式会社 東京都新宿区神楽坂1の2

発 行 所 研究社出版株式会社

〒162
東京都新宿区神楽坂1の2
振替口座東京7-83761番

3398-102006-1860

目 次

グレイとコリンズ	宮下 忠二	1
ブレイク	梅津 濟美	18
バーンズ	中村 為治	39
諷刺文学	西村 孝次	58
伝記・日記・手紙	佐野 英一	73
ゴシック趣味	村岡 勇	87
ホラティウスと古典	樋口 勝彦	102
ポエティック・ディクション	佐々木 達	119
十八世紀の英語	東田 千秋	136
大陸とイギリス文学	島田 謹二	151
ホガース	桜庭 信之	167
科学思想・哲学	原 一郎	181
十八世紀の世相	岡本圭次郎	197
アメリカの時代背景	斎藤 真	211
英米文学年表 (1701-97)		227
索引		243

グレイとコリンズ

宮下忠二

i. トマス・グレイ

十八世紀はじめ頃から中頃にかけてのイギリスといえば、フィールド­ingやジョンソン博士やホガースなどが活躍した時代であり、たくましく、騒々しく、血なまぐさいといった印象さえある。しかしその反面に、清教徒革命がおさまった後の繁栄と安定が続き、戦争や信仰の興奮に乱されない個人生活の充実を楽しんだ時期でもあった。日常の作法など生活様式についての趣味は洗練され、会話や手紙を含めて社交技術が発達した。会話を楽しみ、手紙を書き、訪問をし、日記をつける以外に、長い生涯の間に何もなかった人々もいたのだという。¹

グレイ (Thomas Gray, 1716-71) は、その時代の、そういう個人生活の完成者として典型的な人物である。彼が友人にあてた数多くの手紙を読んでゆくと、他人との交渉を最少限にして、ひたすらおのれ一人の生活を充実させようと努力している、修道僧のような人間像が浮び上がってくる。恋愛や結婚といった面倒な人間関係はもちろん、生計の資を稼ぐための仕事とか、その他普通の社会人の免れ難い利害関係や義務などから全く絶縁して、日々の自由な時間をいかに快適に過ごすかに苦心していたかに見える。

彼がそういう生活を築いたのはケンブリッジの学寮であった。ロンドンの商人の子として生れ、イートン校をへてケンブリッジに学び、ホレス・ウォルポール (Horace Walpole) と2年ほど大陸を旅行して帰国すると、まもなく再びケンブリッジに帰り、研究学生 (fellow commoner) として

1. David Cecil: *Two Quiet Lives*, 1948, Constable, p. 78.

そこに住みついてしまう。かくべつケンブリッジが好きだったわけではなく、「この馬鹿げた、汚らしいところ」(‘this silly, dirty place’) などとこぼしながら、途中で(1756年) ピーターハウス学寮 (Peterhouse College) から向い側の ペンブルック学寮 (Pembroke College) に移住しただけで、ともかく終生をその大学内で過したのである。ぼう大な知識を蓄えながら、その成果を発表しようともせず、桂冠詩人 (Poet Laureate) に推薦されても断り、晩年には近代史教授に任ぜられたが講義は一回もしなかった。



Thomas Gray

生来の虚弱な体質や憂鬱の気質、乱暴な父親にいためつけられた幼年時代の家庭環境、それらが、平常の人生から疎外されている、という被害妄想的コンプレックスをグレイに植えつけたことは疑いない。イートン校ではウォルポールやウェスト (Richard West) ら「四人組」(Quadruple Alliance) と呼ばれた親密な仲間とつき合って幸福だったが、大陸旅行の途中、ウォルポールと喧嘩別れして帰国し、間もなくウェストの死に会う頃 (1742年) から、彼の無常観は決定的なものとなってしまふ。その、人生空しと観ずる諦念は、その頃の作品 *Ode on the Spring* (『春のうた』) から後の *Elegy* (『挽歌』) に至るまで、彼の詩の底流をなしているのである。

しかし、それと同時にグレイは、与えられた運命の中で、独立して生きてゆく決心をしたらしい。学生時代には「ぼくの生活は、粉挽小屋で働く目隠しをされた馬みたいに、ぐるぐる同じところを廻っているだけです」¹とか、「ぼくの本当の誠実な友だちは憂鬱です」²などと泣言を言っていた青年が、ひとりを楽しむ生活技術を身につけた結果、二十数年後には、「自分自身の仕事を見つけることは、偉大なる生活技術です。自分で自分を動

1. Letter to West, Dec. 20, 1735.

2. Letter to West, Aug. 22, 1737.

かすよりも他人の命令で動いた方が気持ちいいとでもいうのか、刺激的な仕事が欲しいとか、骨折仕事にやとわれたい、などと言う人には全く腹が立ちます。…自分一人で過す法を悟るには、何らかの天才が必要なようです。¹ と、自信に満ちた言葉を吐くようになるのである。

彼の精神活動は実に多方面にわたっている。詩作や歴史研究のほかに、花や小鳥や昆虫の生態を調べ、音楽を愛し、建築や造園術に興味を抱き、美術を鑑賞し、読書は古典文学や旅行記ばかりでなく北欧の古い詩に及び、晩年にはスコットランドの高原や湖畔地方へ美しい風景を見に出かけている。しかもそれらの知識と審美感覚は尋常のものでなく、彼の昆虫学はそれまでにない完全なものだったというし、大陸旅行の際、グランド・シャルトルーズ (Grande Chartreuse) の神秘的な美しさに感動したことを伝える手紙²は、彼が英文学史上最も早い山岳自然美の発見者だったことを示している。そして彼が手紙の中に、まるで旅行案内のような形式だった旅日記を書こうと、アリストテレスについての感想を述べようと、ラテン語の書物の名前をカタログのように並べようと、あるいは今日は何の花が咲き、何という小鳥が鳴いた、といった細いことを書きつらねようと、すべてを独自の生活の秩序の中に総合しているグレイの存在がいつも行間に感じられるのである。

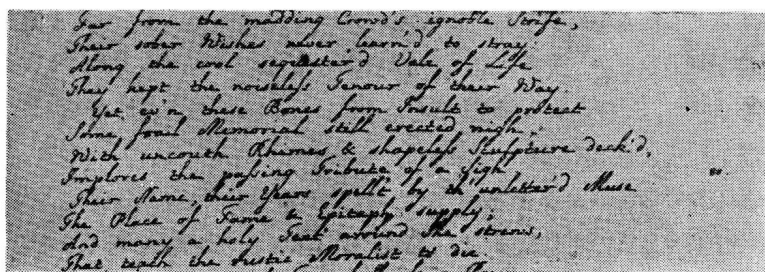
そういう生活態度が、彼の詩作品の少ないこととその詩の特質とに深いかわりを持っている。彼は文筆家であるよりもまず紳士であると自覚していた。³ アーノルド (Matthew Arnold) は、「グレイは真情を吐露しなかった」(‘Gray never spoke out.’)⁴ といい、それは「彼が散文の時代に生れた詩人だったからだ」と評した。彼が他の時代に生れていたらもっと多く

1. Letter to Thomas Wharton, Apr. 22, 1760.

2. Letter to West, Nov. 16, 1739.

3. W. J. Temple の追憶記による。John Mitford: *The Poetical Works of Thomas Gray* の序文および S. Johnson: *Lives of the Poets* 参照。

4. もとは「死が近づいたことを知りながら、他人に口外しなかった」ということで、James Brown が T. Wharton に宛てた手紙にある文句。

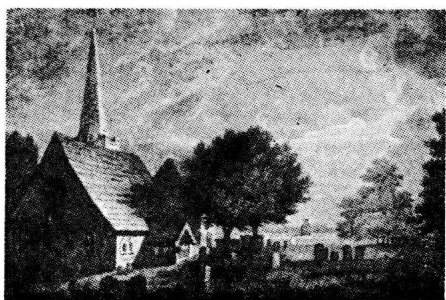


Gray の筆蹟 (Elegy の一部)

の詩を書いたかどうかは別として、ただ、彼のように自分の声のとどくところのみ生活していた人間にとって、彼自身と周囲の数人の人々が築いている一つの完全な宇宙を超えて多くの読者に語りかけることは、彼の秩序に対する潔癖な感覚が許さなかった。彼の抒情詩の多くは、まず友人のウェストやウォルポール個人あてに書かれたものであることも注意してよい。そしてそれ故にこそ彼は、その詩の中に真情を吐露することができたのである。時あたかもダイアー (John Dyer) やトムソン (James Thomson) やグリーン (Matthew Green) やヤング (Edward Young) らが、自然と憂愁と夜の思いとを歌い出して、オーガスタン詩はポーブ流の諷刺詩から瞑想詩へと推移しつつあった。それらの中であってグレイの抒情詩をきわ立たせているものは、第一にその心の奥底を告白する誠実さなのである。

ウェストの死の前後に、グレイは珍らしく一連の短詩を書いた。*Ode on the Spring* はウェストの死を知らずに彼に送ったものである。花開き鳥鳴く春の美しさを讃え、人間も自然界の蜂と同じくただ忙しく働いて死んでゆくのだ、という人生観照に転じ、さらにその老成した無常感に耽る自己の孤独な姿を描いて結んでいる。

Methinks I hear in accents low
The sportive kind reply:
Poor moralist! and what art thou?
A solitary fly!



Stoke Poges Church

and with sentiments to which every bosom returns an echo.”¹

入相の鐘が暮れゆく日を弔う、で始る最初の数節は、夕暮の巧みな描写と見せて、実は、ダンテやミルトンの詩句を駆使して読者を諦念に誘う序曲である。グレイが言いたいことは、

野心家も権力者もついには墓に入ってゆく以上、野に埋れてゆく庶民を嘲ることは出来ない、ということである。

Let not Ambition mock their useful toil,
Their homely joys, and destiny obscure;
Nor Grandeur hear with a disdainful smile,
The short and simple annals of the poor.

(「野心」ゆめな嘲りそ、益多き働きや、
飾りなき喜びや光なきそのさだめ、
「栄華」また高ぶりし笑もて聞くなかれ、
賤の男の一生の短くて事なきを。——福原博士訳)

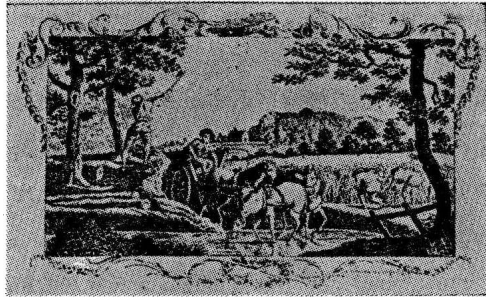
墓場での瞑想や死を歌うことはすでに詩壇の流行であったが、この *Elegy* が、発表と同時に数種の雑誌に転載されて貪り読まれたのは、形式の完璧さと、折からのイギリス社会の変動を敏感に反映する民主的思想とによるものであろう。しかしいうまでもなくグレイは民主的思想を説こうとしたのではなかった。この詩は一旦完成されたのを数年の間に改作延長して現行の形にしたのであるが、その改作の過程を見ても、² グレイがこ

1. Samuel Johnson: 'Life of Gray'. なお *Elegy* は「新体詩抄」(1882)以来、明治から大正にかけてわが国でも最も愛誦された英詩の一つである。

2. 福原麟太郎「トマス・グレイ、その時代と人と詩と詩論」および 'Thomas Gray's *Elegy*: Its Scheme of Composition' (『トマス・グレイ研究抄』) 参照。

Elegy の解釈についてはほかに、William Empson: *Some Versions of Pastoral*; Cleanth Brooks: 'Gray's Storied Urn' (*The Well Wrought Urn*) および、F. W. Bateson: 'Gray's *Elegy* Reconsidered' (*English Poetry*) が示唆的である。

の詩で民主的思想よりも無常観を述べていることが分るのである。すなわちこの詩は単に流行の題材を巧みに歌いこなした、というのではない。母と伯母がストーク・ポージズ (Stoke Poges) に住んでいたのも、グレイはしばしばそこを訪れ、その近辺の農民の生活を観察したらしい。この詩の制作の動機はウェストの死と、それから数年後の伯母の死であったとされているが、愛する人々の死と、農民たちの、権勢も富も得ることなく土に埋れてゆく運命への共感の中に、グレイは長い間彼を苦しめた社会からの疎外感が癒やされるのを感じたのであろう。つまり、外界と自



1753 年版 *Elegy* のさしえ (R. Bentley 筆)

我との対立を鋭くえぐり出している初期の詩と同一の感情に根ざしていながら、この詩ではその対立感が深い無常観の中に融け去っているのである。この詩には死という運命の讃美といった趣さえ感じられる。

Elegy の意外の成功によってグレイは自信を深めた。6 年後に発表した *The Progress of Poesy* (『詩歌の進歩』1757) と *The Bard* (『詩仙』) とは、自ら最高の作品だと考えて世に送った。過去には、生き身の人間に求められない定着した美しさがある。グレイはイートン時代から歴史に深い興味を抱いていたが、ケンブリッジの環境と隠者のような生活とが、ますます過去の美へ彼を誘ったであろう。この二つの詩の題材は過去の文学と歴史である。*The Progress of Poesy* は、詩歌が人間の心身に調和をもたらすことを歌い、詩が古代ギリシアからイタリアをへてイギリスに花開いた次第を歴史的に述べる。コリンズにも詩の歴史を歌った作品があるが、彼がひたすら文学の美を讃えるのに対し、グレイは人生における詩歌の価値を反省し、詩が人心に益をもたらすことを強調しながら、それをあくまでも生

活の倫理的秩序の中に置いている。詩を書いて「善きものには遠く及ばないが、偉大なものをはるかに超えるのだ」(Beneath the Good how far—but far above the Great.—l. 123)

The Bard は、昔エドワード一世がウェイルズを征服した時、詩人を全部処刑したという伝説にもとづき、老詩仙が岩頭に立ってエドワード一世とその軍勢に浴せかける、呪いのこもった予言を歌っている。ノルマン人たる王の血を引くプランタジネット王朝は滅び、代ってチューダー王朝が栄える、という予言であるが、グレイは得意の歴史的知識を駆使し、個有名詞を巧みに用いて詩に奥行と重厚さを加えている。その知識が感傷や想像に流されることなく、厳密な考証に支えられているところに、グレイの歴史眼の新らしさがある。

この二つのオードは複雑なピンダロスの詩形を用い、「知者のみ理解す」という高踏的なモットーをかかげている反面、想像を原始時代や遙かなる国に馳せている点では、ロマン主義に向う時代の趣味をいち早く反映しているといえる。その頃マクファーソン (James Macpherson) がゲーリックの古代詩人オシアン (Ossian) の作と称する詩を発表し、グレイはそれを称揚して、後に自らもアイスランドの古詩から *The Fatal Sisters* (『運命の女神』1761) や *The Descent of Odin* (『オーディン下降』1761) などを翻訳した。晩年のグレイは原始的な土俗趣味を喜び次第にロマンチックに傾いていったのである。

グレイにはほかにラテン詩や未完成の詩がいくつかある。手紙についてはすでに述べたが、そこに含まれる鋭い文学批評は、‘Observations on English Metre’ (『英詩韻律考』) などと共に、彼の文学的業績としてつけ加えておかなければならない。

ii. ウィリアム・コリンズ

グレイは隠者のような孤独な生き方をしながら、実は少数の友人にと

りまかれて、きわめて人間的な生活を営んでいた。コリンズ (William Collins, 1721-59) は、一時は軍人になろうとしてフランダースまで出掛けたり、ロンドンのコーヒー店でトムソンやジョンソン博士らとつき合ったり、芝居小屋に出入したりして、短いがかなり派手な波瀾に富む生涯を送ったのに、彼の精神は全く孤独な世界に住んでいた。たとえば、花や犬や川や人間といった、通常の人間の五感で把握できる現実の事物に、彼は殆ど関心がなく、いつも想像を超自然の神話や伝説の世界に馳せていたらしい。この異常な夢想癖については、親しくつき合ったジョンソン博士の証言がある。



William Collins
(14 才の時の肖像)

「彼は想像力が高揚するのをとくに喜ぶ。それは自然の境界を超え、ついには知性までが世上の伝説を信じこむに至るのである。彼は妖精、地精、巨人、怪物を愛していた」。¹

肉体と精神、現実と夢想とを対立させて考えるならば、コリンズにとって現実とは、精神が心中に展開する夢の世界にほかならなかった。そういう天才は健全な生活者でないことが多い。ジョンソン博士はさすがに道徳家らしく、コリンズの生活が大体において正常なものだった、と弁護的に述べているが、実はかなり奔放な頹廢的な面もあったらしい。チチェスター (Chichester) の市長を勤めたこともある帽子商の子として生れ、ウィンチェスター校からオックスフォードに進み、研究員 (fellow) の空席がなかったためにロンドンに出て、詩をもって身を立てようとした。アリストテレスの『詩学』の註釈とカルネッサンス学芸復興史だとか、数多くの文学的計画を立てていたが、あるいは断片に終りあるいは散佚して、現存

1. "He was eminently delighted with those flights of imagination which pass the bounds of nature, and to which the mind is reconciled only by a passive acquiescence in popular traditions. He loved fairies, genii, giants, and monsters." (S. Johnson: 'Life of Collins')

の作品はきわめて少い。30 才の頃から憂鬱病 (Melancholia) にかかり、次第に狂気に陥り、数年の後には失意と窮乏のうちにこの世を去ってしまう。

彼の作品は生前は全く認められなかった。ジョンソンは、彼が「誤まれる美を追求して」(in quest of mistaken beauties) いたのだ、と評している。しかし彼の精神と想像力とは、それらが働く特有の分野において、英文学史上ほかに類を見ない独特の美しい夢想を描き出していることを認めないわけにはいかない。精神の働きは感覚が捉えたものを抽象化し秩序づけるところにあるとして、コリンズにあってはその感覚の働く場所が、最初から外界自然ではなくて伝説や神話や文学の世界だった。それ故彼が作品に示している想像力は、シェイクスピア、ミルトン、後のシェリー、キーツらの想像力と質を異にしている。彼はオーガスタンの諷刺や教訓調には一顧も与えずに、17 才の時書き始めた *Persian Eclogues* (『ペルシア牧歌集』1742. のちに *Oriental Eclogues* と改題) で、すでに特異な夢想の世界に遊んでいる。これはペルシアに関する書物を読んで想像を逞しくし、その田園や沙漠の生活を描いたもので、とくに第二エクローグの、沙漠を旅する人の恐怖心を描いた ‘Hassan; or the Camel Driver’ (「ラクダ使いのハッサン」) には、純粋な恐怖に満ちた夢の美しさがある。彼の才能は、こういう、当時としては全く新しい夢想の材料の探究に向いていたと思われるが、惜しいことにこの方面の成果としては、ほかに遺作 *Highland Ode* (1749, 後出) が残っているだけである。

どこまでも抽象してやまない彼の精神にとって、細かい情景を描くのは適さないのかもしれない。その点で次の作品 *Verses humbly address'd to Sir Thomas Hanmer* (『ハンマー卿に捧げる詩』1743) は、コリンズの感受性の特質を端的に示している。これはシェイクスピアの全集を編集した貴族を讃えた詩であり、グレイの *The Progress of Poesy* と同様に、古代ギリシアから近代に至る文学の歴史を叙述しているが、コリンズはグレイのよ

うに文学が生活の中で占める位置を反省するのではなく、ひたすら文学の与える純粋な夢想の中に己を没している。その態度は、文学の観照を実生活と絶縁させているという意味で、コリンズが英文学史上、唯義主義の先駆者であることを示すものである。

Odes on Several Descriptive and Allegoric Subjects (『叙景的寓意的な主題についてのオード集』1747) はコリンズの想像力と感受性の特質をもっともよく示している。流行のヒロイク・カブレット (heroic couplet) に反逆してオードの形式を用い、諷刺や教訓でなく想像的な主題を選んだという意味で ‘descriptive and allegoric’ と断ったのである。これらのオードのうち、‘Ode to Liberty’ (「自由によせるうた」)、‘Ode to Peace’ (「平和によせるうた」) は、当時のイギリスの自主独立の機運と、内乱外戦を反映した政治的主題であり、‘Ode to Evening’ (「夕べによせるうた」) は、流行の夕暮の憂愁の気分を歌うものであり、その他、‘Ode to Pity’ (「憐れみによせるうた」)、‘Ode to Fear’ (「恐怖によせるうた」)、‘Ode to Simplicity’ (「単純によせるうた」) などは古典文学の伝統を歌う、など、題材からすればオーガスタン時代の詩の読者を充分念頭においている。しかし、コリンズにとって、思想や感情をイメージによって把握するアレゴリは、単なる観念の擬人化という手法ではなくて、むしろ日常的な思考法だった。

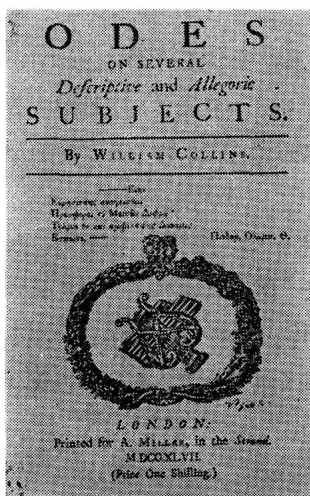
文学の伝統を歌うのに、彼はまずアリストテレスが『詩学』の中で悲劇の情念として説明している「憐れみ」(Pity) と「恐怖」(Fear)、ギリシア以来の芸術のスタイルの理想「単純」(Simplicity)、ミルトンに代表される「詩的天才」(the Poetical Character) などを強く抽象し、それらを想像の中に実感せずにはいられないかに見える。

Thou, to whom the World unknown
With all its shadowy Shapes is shown;
Who see'st appall'd th' unreal Scene,

While Fancy lifts the Veil between ;
 Ah Fear ! Ah frantic Fear !
 I see, I see Thee near. ('Ode to Fear', 1-6)

(おんみ、黒い影の群る
 未知の世界を眺める女神よ、
 想像がとばりを上げる時、
 おぞましき光景に慄然とする女神よ、
 ああ恐怖よ！ああ狂乱の女神よ！
 おんみが、おんみが、近づいてくる。)

それはむしろ美神への祈念であり、その抽象意志はほとんど美への宗教となつて働いている。アレゴリカルな主題を扱ったオードのうちで最も見事なのは、'The Passions, an Ode for Music' (「情念、音楽のためのオード」)である。この詩では古代ギリシアの素朴で力強い音楽の復活を切望しているのだが、「恐怖」「怒り」「希望」「憂愁」などの情念をして、古代



Collins: *Odes* 初版の扉

ギリシアの田園を背景にそれぞれ独得な姿態をもって楽器を奏せしめている。しかしそれら情念の天使のような美しい形象は、ギリシアの晴朗な空でなくて幽暗の世界を舞っていて、それがむしろ、氷雪に閉された暗い北欧を思わせるのは、外界自然に解放されずに文学の伝統の中に閉じこめられた想像力の宿命ともいうべきであろうか。

“How Sleep the Brave” (勇士はいかに眠れる) で始まる ‘Ode, written in the beginning of the Year 1746’ (「1746 年初頭のうた」) は、彼の抽象精神と想像力

とが完璧ともいえる調和を見せている作品であり、‘*Spring, with dewy*

Fingers cold' (露けき指もてる春の女神)、'Honour, a Pilgrim grey' (灰色の巡礼榮譽)、'Freedom, a weeping Hermit' (さめざめと涙する隠者自由)などの形象は、観念の特質を詩的想像によって簡潔に把える見事な手腕を示している。ついでに言えば、トムソンの死を悼むうた (*Ode on the Death of Thomson*, 1749) や *Cymbeline* (『シムベリン』) を読んで作ったうた (*Dirge in Cymbeline*, 1744) などの悲歌は、死がしばしばコリンズの想像を超自然界に高揚させる契機であったことを語っている。

'Ode to Evening' は *Odes* の中でただ一つ 'descriptive' な主題を扱った作品だが、アレゴリカルな主題の詩が、いきなり抽象観念に呼びかけ、しばしばわれわれには堪えられないほどの想像力の高揚を感じさせるのに、この詩では夕べの女神が、ホラティウス風の、一節毎に余韻と共に消えてゆくような無韻の音楽の響きの中に、次第に明瞭な姿を現わしてくる。外界自然に関心のなかったコリンズも、夕暮の微光が示す美には惹かれていて、最近整理された彼の遺稿でも、¹ 夕暮のやわらかな光の美しさを歌っている。この詩では、夕べの美に感動のあまり、常に高揚してやまない抽象精神と想像力とを抑制して、詩人は自然の音楽と風景とに、謙虚に対している。自我を文学の伝統と自然とに従わせた彼の感受性は今や純粹な媒体となり、ホラティウスやミルトンの詩が奏でる音楽と同様に、そよ風の流れや泉のふつふつと湧く音にも聞き入るのである。この時、彼の内面の、抽象観念が群る幽暗の世界が、外界の現実の風景と融合し、宵の明星の光り始めると同時に、妖精や季節の女神や歓喜の観念らが、コリンズの眼前の自然の中に姿を現わしてくる。

For when thy folding Star arising shews
His paly Circelet, at his warning Lamp
The fragrant Hours and Elves

1. J.S. Cunningham: *William Collins. Drafts and Fragments of Verse*, 1956, Oxf. U.P.

Who slept in Buds the Day,
 And many a *Nymph* who wreaths her Brows with Sedge,
 And sheds the fresh'ning Dew, and lovelier still,
 The *Pensive Pleasures* sweet
 Prepare thy shadowy Car. (21—28)

(見よ、羊をかえす星の今昇り出で、
 青白き灯を示せば、その警めの灯に、
 かぐわしき「時」の女神ら、日のうちは
 花に眠れる妖精ども、
 額に菅を巻き飾り、すがしき露をしたたらす
 あまたのニムフラ、また愛らしき、
 甘きうれしいの喜びたちが、
 かげ深きおんみの車を仕度する。)

これは精神の世界と外界自然とが融合した境地だともいうべきだろうか。この時詩人はほとんど妖精と化して、薄暮の自然の中に出てゆくかに見えるのだが、やがて女神が夕闇のとばりを引きおろすと共にすべては消え、読者は深い憂愁の中に残される。この詩が、たとえばトムソンやクーパー (William Cowper) らの自然観照と違って、読むたびに奥行の深さを感じさせるのは、古典に鍛えられた感受性による自然美の発見という、稀有な体験を語っているからである。

Odes はともかくもコリンズの本質的な何かを表現している。この詩集のために彼は後に次第に認められ、グレイと並んでオーガスタン瞑想詩人の代表的な存在となった。その他、*An Ode on the Popuclar Superstitions of the Highlands of Scotland* (『スコットランド高地地方の民間の迷信をうたう』1749) は遺稿であるが、山間の人間生活に立入ってくる妖精や鬼火で人を誘惑する妖怪や、死んだ王侯たちの深夜の会合などを歌い、そういう迷信が新しい詩の主題になるのだと、スペンサー連を用いて述べている。これは、マクファーソンの *Ossian* やグレイのアイスランド古詩の翻